

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

シルバー人材センター会員の生活・意識状況 ： 武蔵村山市のケース・スタディーを中心と して

KOBAYASHI, Kenichi / 小林, 謙一

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

54

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

28

(発行年 / Year)

1986-07-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008459>

シルバー人材センター会員の 生活・意識状況

——武蔵村山市のケース・

スターディを中心として——

小 林 謙 一

1. シルバー人材センターと登録会員のプロフィール

1975年、東京都の江戸川区と昭島市に誕生した高齢者事業団は、1980年、他の90の事業団とともにシルバー人材センターという名称も持つことになった。ある一定の要件を充たした事業団が、東京都などの地方自治体からの補助に加えて労働省の補助もえられるようになったからである。その補助を受けるシルバー人材センターは、その後、おもに大都市とその周辺を中心として急激に増加し、1985年10月現在、全国で258団体に達している。それらのセンターに登録している高齢者数もほぼ順調に増加し、1984年には全国で10万人を超える規模に達している。これらの登録会員は、センターが地域から受託する作業に就業することを待っているわけだが、その就業率も過半を上回るように高まってきている。シルバー人材センターとしての発足当時は35%ほどだったが、84年度には62%に上昇してきている。もっとも、この就業率の計算は年間一日でも就業した会員を分子としているのだが、就業実人員一人あたりの年間延日数は、84年度で93.5日間になるから、月間、平均して8日間近くの就業ということになる¹⁾。

- 1) これらの数値は『全国シルバー人材センター』第9号、全国協議会、1985年刊による。なお、こうしたセンター以外に「生きがい事業団」とか、全日自労系の事業団まで含めて多数の高齢者事業団が活動している。それらの比較研究

2 シルバー人材センター会員の生活・意識状況

については、われわれの共同研究による「高齢者事業団アンケート調査報告」、大原社研『研究資料月報』1985年10・11月号をみよ。

これに対し、全国のシルバー人材センターが受託した契約金額は、84年度で226億円余りに達するから、就業実人員一人当たり年間34万円、一日当たり3.6千円ほどに達することになる。それに対し、就業そのものがかなり大きな目的になっており、中年者の就業もかなりのウエイトを占めている全日自労系の中老年事業団では、日額も年額も何倍かに達すると推定される。それにくらべれば、センター就業会員の収入は確かにより少ないが、しかし、センターの登録会員の入会動機は、全体の50%が「健康」であり、「経済」は25%ほどに止まっている。ここで「健康」というのは、いうまでもなく健康のためであり、「経済」といわれているのは、なんらかの収入をえたい、ということであり、ほかに「社会のために役立ちたい」、「友達が欲しい」などという動機もみられる。したがって、収入は少ないにしても、このように健康などを目的とする入会動機はかなり充たさせているとみてよい。

このような入会動機からも知られるように、シルバー人材センターの会員の大部分は年金生活者であり、本格的な就業者ではない。この点は高齢者事業団の設立当初からの本質的な特徴であり、また事業団側としても失対事業の代替として就業の保障を公共的課題として受け継がないように配慮した点でもある。また、シルバー人材センターに関する1980年の労働事務次官通達でも、わざわざつぎの点を強調しているのである。「雇用関係でない何らかの就業を通じて、労働能力を活用し、追加的収入を得るとともに生きがいの充実等を希望する高年齢者に対して、地域社会の日常生活に関連した補助的、短期的な仕事を提供する高年齢者の自主的な団体」という規定をあたえている。そして、「地域において一般的に常用雇用、日雇、パートタイム、家内労働等」の「雇用または就業の場を侵蝕したり、労働条件等の低下を引き起こすおそれのある」「仕事は取り扱わない」という限定も設けているのである。

しかしながら、(1)果たして地域の「雇用または就業の場を侵蝕したり」せずに済むのだろうか。というのは、現状では東京都でも60歳以上の高齢者の2%を多少上回るほどしか会員として組織していないが、さらに組織活動などを強化し、受注活動や会員の技能研修を拡充していくとしたら、「日雇、パートタイム、家内労働等」をより一層「侵蝕」することになるだろうからである。(2)会員の自主性の形成も待たずに「自主的な団体」であることと規定し、行政の責任をあいまいにしているのも、現状では問題を残すだろう。というのは、われわれの事業団事務局調査によれば²⁾、「組織運営上の問題」として「会員の自主的な運営が不十分である」という指摘がもっとも多く、「理事会が十分機能していない」、「事務局の陣容が不十分である」などという指摘を上回っているからである。

2) 前掲、大原社研『研究資料月報』1985年10・11月号をみよ。

2. シルバー人材センターの調査活動

このように、シルバー人材センターは、地域の就業構造のなかにかに位置づけられるべきか、人的・財政的にいかに運営されるべきか、さらに高齢者事業団としての登録会員は65歳以上の高齢者が大きなウェイトを占めているにもかかわらず、労働省助成のシルバー人材センターとしては、無理に、60歳代前半を中心とした就業政策の手段とされていることなど、さまざまな問題を抱えている。このような問題を当のシルバー人材センターはいかに受け止めているか。その点について、東京都高齢者事業振興財団『年報』1985年度などをみると、(1)一般的な「普及・広報」を始め、(2)「仕事の開拓」、(3)技能などの「研修」、および(4)「調査研究」などに力点が置かれており、組織・運営上の問題や就業構造上の位置づけなどについて、格別の問題意識を示しているようには感じられない。

しかしながら、「調査研究」にはおのずと反映されているかも知れない。財団としての最近の調査には、「就業における事故実態とその対策」(83年)、「独自事業調査」(85年)および「未就業会員実態調査」(85年)などがあ

4 シルバー人材センター会員の生活・意識状況

るが、これらの報告のなかにも問題点が示唆されていることを読み取ることができる。とくに「未就業会員実態調査」では、結論として、事務局側の連絡も不十分な点が残されているだけでなく、会員への仕事の割り当てにも問題を残しており、地域班などの自主的活動などが不備なため、会員のニーズに細かく対応していないことを指摘している。もちろん、この報告があきらかにしているように、会員が連絡を受けても就労しなかったり、会員の方から問い合わせもしなかったりすることも問題だが、その理由として会員が希望するような適当な仕事や条件が不十分なことがかなりのウェイトを占めている。したがって、センターとしての受注活動がもっと活潑になれば、就業率が高まると同時に、問題の「侵蝕」などが発生するかも知れないのである。

これらの点については、新潟市のセンターとの調査の提携を進め、毎年のように貴重な調査研究を行なっている東京都文京区のセンターの「就業と仕事」調査（84年）でもあきらかにされている。それは、会員の「事業団への意見と要望」としてあきらかになっている点であるが、ここで仕事の割り当てに「不公平感」が持たれている向きがあり、配分金にも不満があるだけでなく、配分金からその5%が天引きされる事務費にも不満を持ち、その用途にも疑問を抱いている。およそ自主的な運営からかけ離れた側面を示している、とみてよい。さらに、文京区のセンターなどとともに精力的な調査活動を行っている東京都荒川区のセンターの「未就労会員調査」（84年）の自由記入欄にも、10%足らずの会員ではあるが、適確な「不満・苦情」が寄せられている。それによれば、ここでも仕事の割り当て、とくに希望に合った仕事が少ないうえに、役員や地域班の推進委員の相談が不十分であることなどが指摘されており、運営各部門を全会員によって分担することが提案されている。因みに、前年度の荒川区のセンターと社会福祉協議会の高齢者無料職業紹介所との共同調査によれば、会員のなかに地域班の推進委員を知らぬ者が40%もいた事実が報告されている。

これらのほか、シルバー人材センターではさまざまなテーマの調査研究

が試みられている。東京都の武蔵村山市や東久留米市などのセンターの発注者調査もあり、さきの文京区と新潟市などの会員調査のほか、リサイクルで名高い武蔵野市の会員・非会員調査も行なわれる。また小金井市や多摩市などの高齢者一般調査のなかで会員を位置づける調査も実施されている。

それらによると、(1)発注側が事業団を知ったルートとして、市の広報を始め、知人の紹介が大部分を占め、事業団としての、あるいは会員自体の受注活動はいかにも少ない。(2)とくに民間事業所では一般の雇用との差異を認識しているケースが少ない。このことは、(1)なども含む事業団としての広報活動の不足を示しているのだろう。(3)会員の生活実態とニーズをあきらかにし、とくに会員としての考え方や行動とそれらを規定する要因を検討することが重要だろう。それについては、以下で若干のケース・スタディを試みるが、そのためにも、(4)事業団の会員とならない高齢者や、あるいは主として無料職業紹介所や授産所などに依存する高齢者などとの比較もまた重要である³⁾。

- 3) その点について、経済企画庁編『高齢者の新しい社会参加活動を求めて——高齢者の能力活用に関する実態調査』1983年では、高齢者事業団のほか、さまざまな生産活動、老人クラブ、趣味・教養活動などを比較調査し、「中の下」を中心とした生活レベルの高齢者が公共的な呼びかけによって事業団に組織され、社会的貢献度も高齢者としての生きがいもかなり高い状態で就労していることがあきらかにされている。その紹介と若干のコメントなどについては、拙稿「高齢者の社会参加活動」、大原社研『研究資料月報』1986年2月号もみよ。

3. 登録会員の生活・意識状況

武蔵村山市センターの概況と調査内容

以下では、登録会員の生活と意識の状況の重要な側面を知るために、武蔵村山市のセンターの会員調査の結果を分析する。この調査は1984年に実施されたが、センターからその結果が提供されたので、私の研究室で集計することになった。同センターの会員数は、調査時点で、男181、女130、計311人を数えるが、東京都の近郊なので高齢化があまり進んでいない割

6 シルバー人材センター会員の生活・意識状況

表 1 男女・年齢階層別会員構成・就業率・集計対象構成 (%)

年齢階層	会 員			就 業 率			集 計 対 象		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
60歳未満	—	6.2	2.6	—	87.5	87.5	—	5.6	2.4
60～64	17.1	29.2	22.2	64.5	71.1	68.1	16.0	31.9	22.9
65～69	37.0	33.1	35.4	74.6	55.8	67.3	44.7	26.4	36.7
70～74	33.7	20.8	28.3	59.0	85.2	67.3	28.7	25.0	27.2
75～79	10.5	10.0	10.3	47.4	84.6	62.5	10.6	11.1	10.8
80以上	1.7	0.8	1.3	0.0	25.0	25.0	—	—	—
計	100.0	100.0	100.0	63.5	71.5	66.9	100.0	100.0	100.0

武蔵村山市高齢者事業団資料，1984年による。ただし，集計対象から性不明者を除く。

には60歳以上の人口に占める会員率は高く，7%近くにも達している。というのは，センターの活動が活潑だからでもあるが，それと同時に第二次大戦直後まで農村地域だったので高齢者の勤労意欲が高いのに，現在は農業も衰退し，それ以外の就業機会も少ないことを反映しているのだろう。このような傾向は，多かれ少なかれ東京の多摩地域に共通した現象だ，とみてよいただろう。

このセンターの会員もまた，表1のように60歳代後半を中心に分布しており，とくに男性のばあいあきらかなように65歳未満よりも70歳以上の方がより多くなっている。しかし，就業率はより若いほど高くなっており，さすがに80歳以上では25%に止まっている。しかし，男女別にみるとやや複雑な就業率構造と示している。男性のばあいは65歳代後半において就業率ももっとも高く，女性のばあいは60歳未満と70歳代で80%を優に超えるようなU字型の分布となっており，より若いほど就業率が高いとはかならずしもいい切れない。このように，男性60歳代前半，女性60歳代後半でとくに就業率が低くなっている理由は，のちにある程度あきらかになるだろう。

以上の通り，このセンターの就業実人員は男女とも200人を多少上回っているが，1984年度の一人当たり配分金を算出してみると，年額38.2万円

になる。一人当たり年間就業日数は117.5日になるから、一日当たり3,250円の配分金ということになる。これを東京都の全センターと比較してみると、全センターの年間配分金40万円よりやや少ない。それは全センターの一日当たりが配分金3,327円、年間就業日数120日よりも、ほぼ同じ程度少なくなっているからであるが、その差にきわめて少ない、とみてよい。

同センターの会員調査は、登録会員全員を対象としたが、有効回答は男94人、女72人、計175人からえられたから、回収率は男52%、女55%である。集計対象の男女比は男54%だから登録会員全体の58%をやや下回っており、また年齢階層構成も表1のとおり男性は60歳代後半、女性は70歳代前半などにやや集中しているが、全体とすれば登録会員の構成とそれほど異ならない、とみてよい。

今回のアンケート調査は、(1)男女、年齢、同居世帯の構成を始め、(2)高齢者が働くことの意味、(3)事業団で働いてみた感想、(4)配分金の使途、(5)事業団がないばあいの選択行動、(6)自分の周囲からみた感想、(7)事業団に入ってからの変化、(8)仕事の種類、就業日数・時間、配分金の希望、(9)事業団への希望・意見などが調査事項となっている。この調査では、回答者の氏名を記入するように設計されており、センターとすれば会員の(7)などの希望とその背景を個々に把握することが大きな目的になっていたに違いない。ただし、調査資料としては氏名を記入することによる制約もあるが、(9)の自由記入による事業団への希望・意見などには、個人としての責任のある回答が寄せられている可能性が高い、とみてよい。

高齢者が働く意味と働いてみた感想

まず高齢者が働くことの意味から問うていこう。質問は「あなた自身を含めて高齢者が働くことについてどう思いますか」であるが、それに対する回答は、表2のようにすべてが「働いた方がよい」と答えている。実は調査票には、「家に居て楽をしている方がよい」とか、「もう現役を退いたのだから」とか、「体力がないから」とか、「生活費の心配がないから」など

8 シルバー人材センター会員生活・意識状況

表 2 男女・年齢階層別高齢者が働くことの意味

(MA, %)

性・年齢	家にいるより	地域のため	健康のため	働けるうちは	その他	無回答	計	
総数	105 (60.0)	71 (40.6)	127 (72.6)	138 (78.9)	2 (1.1)	14 (8.0)	457 (261.1)	
男	60~64歳	9 (60.0)	4 (26.7)	10 (66.7)	13 (86.7)	—	1 (246.7)	37
	65~69	25 (59.5)	20 (47.6)	32 (76.2)	31 (73.8)	1 (2.4)	3 (266.7)	112
	70~74	20 (74.1)	15 (55.6)	21 (77.8)	21 (77.8)	—	2 (7.4)	79
	75~79	4 (40.0)	4 (40.0)	4 (40.0)	6 (60.0)	—	2 (20.0)	20
	計	57 (60.6)	43 (45.7)	65 (69.1)	71 (75.5)	1 (1.1)	8 (8.5)	245 (260.6)
女	~59	2 (50.0)	1 (25.0)	3 (75.0)	4 (100.0)	—	—	10 (250.0)
	60~64	10 (41.7)	8 (33.3)	18 (75.0)	20 (83.0)	—	—	56 (233.3)
	65~69	14 (73.7)	8 (42.1)	14 (73.7)	17 (89.5)	—	1 (5.3)	54 (284.2)
	70~70	11 (61.1)	6 (33.3)	12 (66.7)	13 (72.2)	—	—	42 (233.3)
	75~79	6 (75.0)	4 (50.0)	8 (100.0)	8 (100.0)	—	3 (37.5)	29 (362.5)
計	44 (60.3)	27 (37.0)	57 (78.1)	62 (84.9)	—	4 (5.5)	194 (265.8)	

総数には性不明 8 人の回答も含む。パーセントは男女・年齢階層別人数を分母とする。

の選択肢を設定し、「働かなくてよい」という回答も用意されていたのだが、この回答はだれも選択しなかったのである。この地域の高齢者の生活観の特徴が端的に示されている。「働いた方がよい」とする理由として、「働けるうちは働いた方がよい」、「健康のためによい」が多回答方式でそれぞれ70~80%の回答をえており、きわめて勤労志向が高いことが知られる。もっとも「家に居るより外で働いた方がよい」という消極的な回答も60%を占めており、「家に居て」は「楽」をできないケースも含まれているのかも知れないが、現役からの引退意識や体力減退や経済的理由で「働

かなくてよい」という考え方はまったくみられない。このように、集計対象である会員の勤労意欲はかなり高く、それは完全に引退している高齢者と比べれば、よりあきらかなことだろう。

このように「健康のため」にもよいし、「働けるうちは働いた方がよい」し、それに「家に居るより外で働いた方がよい」という意識の仕方は、男女でそれほど違いがないが、「働けるうちは」、「健康のため」の比率は女性の方がやや高くなっている。それに対し男性の方は「地域社会の役に立つべきだ」という回答が46%に達し、女性の37%を多少上回っている。男性でも60歳代後半と70歳代前半でとくに高く、50%前後に達しているが、この「地域」のためという意識のなかには、自己の経験や能力の発揮を含む、より積極的な自己実現志向も含まれているのだろう。そのほかはあまり年齢差がみられないが、「家に居るより」は、という意識は、男性70歳代前半、女性65歳以上でより強くなっている。したがって、より高齢者に比較的多い、とみてよい。

以上のように、働くことへの志向が高い点に登録会員の考え方が示されているが、実際に事業団を通して就業してみてもどのような感想を持ったのだろうか。それへの回答は表3のとおりである。それによると、80%近くが「働くことは楽しい」と答えている。つづいて「友達ができた」、「仕事は無理しないでやれた」という回答が50%ほどに達している。この回答状況から回答者の就業率がきわめて高いことが想像される。さらに、「楽しい」という感想のなかには「友達ができた」喜びも含まれているのだろうし、また「無理」を心配していたのがそうではなかったことの安心も含まれているのだろう。このほか、調査票には「よくなかった」理由として「働くのはつらい」、「他人とかかわるのは面倒くさい」、「身体に無理して仕事をした」などの選択肢も設定されていたが、「仕事に比べ、配分金が安い」という回答が9%ほどあっただけで、大部分が「働いてよかった点」を指摘しており、比較的健康で、仕事好きで、交際もいとわない高齢者として、その満足感はきわめて高い、とみてよい。

表 3 男女・年齢階層別事業団で働いてみた感想

(MA, %)

性・年齢	楽しい	友達が できた	無理せ ずでき た	配分金 に満足	配分金 が安い	その他	無回答	計	
総数	136 (77.7)	99 (56.6)	86 (49.1)	56 (32.0)	16 (9.1)	11 (6.3)	15 (8.6)	419 (239.4)	
男	60~64歳	15 (100.0)	7 (46.7)	8 (53.3)	3 (20.0)	—	—	33 (220.0)	
	65~69	32 (76.2)	25 (59.5)	20 (47.6)	11 (26.2)	3 (7.1)	2 (4.8)	3 (7.1)	96 (228.6)
	70~74	19 (70.4)	12 (44.4)	11 (40.7)	11 (40.7)	4 (14.8)	1 (3.7)	4 (14.8)	62 (229.6)
	75~79	6 (60.0)	5 (50.0)	4 (40.0)	4 (40.0)	—	—	4 (40.0)	23 (230.0)
	計	72 (76.6)	49 (52.1)	43 (45.7)	29 (30.9)	7 (7.4)	3 (3.2)	11 (11.7)	214 (227.7)
女	~59	2 (50.0)	2 (50.0)	4 (100.0)	2 (50.0)	—	1 (25.0)	—	11 (275.0)
	60~64	21 (87.5)	14 (58.3)	11 (45.8)	7 (29.2)	3 (12.5)	2 (8.3)	—	58 (241.7)
	65~69	14 (73.7)	12 (63.2)	9 (47.4)	5 (26.3)	2 (10.5)	3 (15.8)	1 (5.3)	46 (242.1)
	70~74	15 (83.3)	12 (66.7)	12 (66.7)	8 (44.4)	3 (16.7)	1 (5.6)	—	51 (283.3)
	75~79	6 (75.0)	4 (50.0)	4 (50.0)	4 (50.0)	1 (12.5)	—	2 (25.0)	21 (262.5)
計	58 (79.5)	44 (60.3)	40 (54.8)	26 (35.6)	9 (12.3)	7 (9.6)	3 (4.1)	187 (256.2)	

総数には性別不明8人の回答も含む。パーセントは男女・年齢階層別人数を分母とする。

もっとも氏名を記入しなければならなかったのが、否定的な評価は記しにくかったのかも知れないが、要望につながるような会員の意見などはまたのちにみるとして、表3を男女・年齢階層別にもみておこう。

それによると、(1)もっとも回答の多い「楽しい」は、60歳代前半や70歳代前半のように女性でより顕著だが、男性ではより若いほど「楽しい」と回答している。(2)つぎに多い「友達ができた」、「無理せずできた」という回答は、(1)より以上に女性に多くなっている。そのなかでも、「友達ができた」という回答は男性の60歳代後半、とくに女性の65~74歳層でより多

く、そのことが就業を楽しんでいるのだろう。「無理せずできた」という回答は、予想に反してより若い会員ほど多くなっているが、それだけちゃんと仕事をしようという期待を持っていたか、あるいは健康などがすぐれた人が会員になっているのかも知れない。(3)「配分金」については、「満足」も「安い」も女性でいちじるしくなっている。しかも両方とも、いずれかといえばより高齢者ほど多いが、とくに「不満」が男性70歳代前半、女性70歳代以上で多いのは、すでに問題にしてきたように、高齢化するほど事業団によって割り当てられる仕事の配分金単価がより低いような仕事になったり、期待したほどの就業日数が割り振られないからだろう。

事業団がないばあいの選択行動

以上みた「事業団で働いてみた感想」の意味をまた別の視角からあきらかにするために、「もし事業団がなかったら、どうしていると思いますか」という問いへの回答をみておこう。その結果は表4のとおり一人当たり1.3件しか回答していないから、選択の幅はそう大きくないが、(1)もっとも多いのは他の「就業」であり、45%に達し、ついで多いのが「働きたくてもちょうど良い仕事が見つからない」という「失業」であり、31%を数えている。(2)これに対し、「老人クラブで楽しんでいる」、「社会奉仕に参加している」、「家にいる」は、合計しても40%に止まっており、(1)よりはるかに少なくなっている。(3)このように、集計対象の会員たちの勤労意欲が高いことを反映し、実に会員の70%以上も労働力として止まろうとしており、非労働力化して「老人クラブ」や「社会奉仕」で活動するという選択は30%ほどに止まっているのである。

これを男女・年齢階層別にみると、つぎのような興味深い事実があきらかになる。(1)「就業」の比率はあきらかに男性において高く、60歳代前半では70%以上にも達している。(2)これに対して「失業」の比率は女性で高く、とくに60歳未満では75%にも達している。このように、全体として勤労意欲が高いなかでも、より若い高齢者ほど労働力志向が高いのに対し、

表4 男女・年齢階層別事業団がないばあいの選択

(MA, %)

性・年齢	就業	失業	老人 クラブ	社会 奉仕	家に いる	その他 無回答	計
総数	79 (45.1)	55 (31.4)	35 (20.0)	20 (11.4)	15 (8.6)	29 (16.6)	233 (133.1)
男	60～64歳	11 (72.3)	5 (33.3)	—	1 (6.7)	— (6.7)	18 (120.0)
	65～69	24 (57.1)	10 (23.8)	7 (16.7)	5 (11.9)	4 (9.5)	54 (128.6)
	70～74	15 (55.6)	7 (25.9)	9 (33.3)	4 (14.8)	2 (7.4)	41 (151.9)
	75～79	4 (40.0)	1 (10.0)	2 (20.0)	1 (10.0)	— (40.0)	12 (120.0)
	計	54 (57.4)	23 (24.5)	18 (19.1)	11 (11.7)	6 (6.4)	13 (133.0)
女	～59	—	3 (75.0)	—	—	1 (25.0)	1 (125.0)
	60～64	6 (25.0)	10 (41.7)	2 (8.3)	3 (12.5)	3 (12.5)	3 (112.5)
	65～69	10 (52.6)	7 (36.8)	5 (26.3)	2 (10.5)	2 (15.8)	3 (152.6)
	70～74	6 (33.3)	8 (44.4)	7 (38.9)	3 (16.7)	2 (11.1)	2 (155.6)
	75～79	—	2 (20.0)	2 (20.0)	—	—	4 (80.0)
計	22 (30.1)	30 (41.1)	16 (21.9)	8 (11.0)	8 (11.0)	13 (17.8)	97 (132.9)

総数には性不明8人の回答を含む。パーセントは男女・年齢階層別人数を分母とする。

(3)「老人クラブ」、「社会奉仕」の非労働力志向は70歳以上などのより高齢の世代ほど強くなっていることがあきらかになる。

配分金の使途

前述のように全体として配分金にも満足感が高かったが、その使途をあきらかにすることによって、仕事とそれによる配分金が会員にとって持つ意味をあきらかにしておこう。その回答は表5のとおりだが、多回答で一人あたりほぼ2つほど答えているなかで、やはり「自分の小遣い」がもっとも多く、50%を多少上回っている。つづいて「旅行や交際」、「生活費の

表 5 男女・年齢階層別配分金の使速

(MA, %)

性・年齢	自分の小遣い	旅行や交際	生活費の一部	貯金	家族への贈物	自分の趣味に	家族に渡す	その他無回答	計
総数	94 (53.7)	58 (33.1)	65 (37.1)	10 (5.7)	28 (16.0)	47 (26.9)	17 (9.7)	20 (11.4)	33.9 (193.7)
男	60~64	6 (40.0)	5 (33.3)	9 (60.0)	1 (6.7)	1 (6.7)	4 (26.7)	1 (6.7)	28 (186.7)
	65~69	20 (47.6)	12 (28.6)	18 (42.9)	2 (4.8)	8 (19.0)	11 (26.2)	10 (23.8)	86 (204.8)
	70~74	15 (55.6)	9 (33.3)	13 (48.1)	—	2 (7.4)	7 (25.9)	3 (11.1)	51 (188.9)
	75~79	5 (50.0)	3 (30.0)	2 (20.0)	—	1 (10.0)	2 (20.0)	2 (20.0)	19 (190.0)
	計	46 (48.9)	29 (30.9)	42 (44.7)	3 (3.2)	12 (12.8)	24 (25.5)	16 (17.0)	184 (195.7)
女	~59	3 (75.5)	3 (75.5)	—	—	2 (50.0)	2 (50.0)	—	10 (250.0)
	60~64	16 (66.7)	6 (25.0)	6 (25.0)	1 (4.2)	5 (20.8)	8 (33.3)	—	43 (179.2)
	65~69	10 (52.6)	6 (31.6)	7 (36.8)	4 (21.1)	4 (21.1)	5 (26.3)	1 (5.3)	38 (200.0)
	70~74	13 (72.2)	8 (44.4)	4 (22.2)	1 (5.6)	2 (11.1)	5 (27.8)	—	35 (194.4)
	75~79	3 (37.5)	3 (37.5)	4 (50.0)	—	1 (12.5)	—	—	13 (162.5)
計	45 (61.6)	26 (35.6)	21 (28.8)	6 (8.2)	14 (19.2)	20 (27.4)	1 (1.4)	139 (190.4)	

総数には性別不明 8 人の回答を含む。パーセントは男女・年齢階層別人数を分母とする。

一部)、「自分の趣味」が30%以上あるいはその近くに達している。これらのうち、「自分の趣味」も「自分の小遣い」に入れてよいだろう。さらに「生活費の一部」というのは、ここに掲げられた選択肢の大部分以外の基礎的な生活費の「一部」と考えてよいだろう。それは全体として40%を下回っており、「自分の小遣い」を始め、「旅行や交際」、「自分の趣味」、「家族への贈物」が合計して130%を占めており、全体として基礎的な家計支出としてではなく、より選択的な支出に使われていることがわかる。

だが、男女・年齢階層別にみると、多少様相を異にする。「生活費の一

14 シルバー人材センター会員生活・意識状況

部」に入れている比率は男性で高くなっており、とくに60～64歳層では60%に達している。さらに男性では「家族に渡す」も比較的多く、これは「貯金」とともに基礎的な生活費かどうか識別できないが、基礎的な生活費を負担しようとする男性の家庭内地位を示している、とみてよい。これに対し、一人暮らしの多い75歳以上の女性のばあいも「生活費の一部」の比率が高くなっているが、それを除けば女性のばあいは、とくに「自分の小遣い」を始め、「旅行や交際」、「趣味」、「贈物」の比率が高くなっている。このように女性を中心として配分金は家計支出の選択的部分に当てられることが多く、それだけに配分金は生活にある種の潤いをあたえている、とみてよい。

さらに、これまでの考察をより深めておくために、最初の高齢者が働く意味と配分金の用途のクロスをみておこう。それを示した表6によると、(1)「生活費の一部」の比率は男性の「家にいるより」と「働けるうちは」で多少とも高くなっている。とすると、「働けるうちは」「生活費の一部」を稼ぐほかに、「家にいるより」楽しいというよりは積極的に「生活費の一部」を働く、と意識している会員もいることを示している。(2)これに対し、もっとも回答の多い「自分の小遣い」は女性の「地域のため」などで多少より高率になっている。一挙兩得だ、というわけである。(3)つづいて多い「旅行や交際」は男女とも「地域社会のため」で他より多少高率になっており、「地域社会のため」という意味づけが、仲間づくりも含んでいることを示している。(4)つづいて回答の多い「自分の趣味」では、「健康のため」、「働けるうちは」、「地域のため」でより高率になっている。というのは、とくに女性において「健康のため」とはいいながら、とくに女性のばあい、「小遣い」や「趣味」のためにも役立っていることになる。同様に「働けるうちは」といいながら、「趣味」のニーズも満たしているわけである。さらに、同じ「働けるうちは」という意味づけでも、男性のばあい、「生活費の一部」を稼いでいるのは女性とは異なった側面も示している、とみてよい。

表 6 男女・働く意味別配分金の使途

(MA, %)

就業の意味	自分の 小遣い	旅行や 交際	生活費 の一部	貯 金	家族へ の贈物	自分の 趣味に	家族に 渡す	その他 ・不明	計	
男	家にいるより	39 (68.4)	26 (45.6)	36 (63.2)	4 (7.0)	9 (15.8)	18 (31.6)	14 (24.6)	1 (1.8)	147 (257.9)
	地域社会のため	23 (53.5)	20 (46.5)	17 (39.5)	4 (9.3)	6 (14.0)	12 (27.9)	7 (16.3)	2 (4.7)	91 (211.6)
	健康のため	41 (63.1)	30 (46.2)	33 (50.8)	4 (6.2)	10 (15.4)	19 (29.2)	14 (21.5)	2 (3.1)	153 (235.4)
	働けるうちは	44 (62.0)	32 (45.1)	39 (54.9)	5 (7.0)	10 (14.1)	18 (25.4)	15 (21.1)	2 (2.8)	165 (232.4)
女	家にいるより	25 (56.8)	16 (36.4)	17 (38.6)	6 (13.6)	8 (18.2)	14 (31.8)	1 (2.3)	2 (4.5)	89 (202.3)
	地域社会のため	17 (63.0)	13 (48.1)	13 (48.1)	3 (11.1)	5 (18.5)	9 (33.3)	1 (3.7)	—	61 (225.9)
	健康のため	34 (59.6)	22 (38.6)	22 (38.6)	6 (10.5)	9 (15.8)	19 (33.3)	1 (1.8)	2 (3.5)	115 (201.8)
	働けるうちは	35 (56.5)	25 (40.3)	23 (37.1)	6 (9.7)	12 (19.4)	21 (33.9)	1 (1.6)	2 (3.2)	125 (201.6)

就業の意味の回答を分母とするパーセントを示す。

会員になってからの生活変化

すでに、事業団で働いてみた感想はあきらかになったが、事業団に加入してからの「自分の生活の変化」についてあきらかにしておこう。それは表7のとおり、(1)「健康によかった」を始め、「生活に張り」がでた、という回答が多く、それぞれ60%前後以上に達している。(2)つづいて、「友達がふえた」、「小遣いができた」、「家族が喜んでいる」、「社会に役立つ」が多く、それぞれ40%前後に達している。(3)それらに対し、「経験・能力が生かされた」、「初めて働いた」は20%内外に止まっている事実にも注目しなければならない。(4)そのほか、「家族がいやがっている」などのネガティブな選択肢も示されているが、ここでも肯定的な評価が大部分を示しており、平均して1人当たり3件以上の回答を寄せているのである。

これを男女・年齢階層別に立ち入ってみると、(1)もっとも多い「健康によかった」という比率は、女性よりも男性においてより高く、70%にも達している。この回答は女性では65～74歳層で高いが、男性ではより若いほど高率になっている。ということは、「経験・能力が生かされた」などの他の評価が比較的少なかったからかも知れない。(2)「生活に張り」の比率は、逆に女性の方がかなり男性を上回り、女性では若い層でも高いが、男女とも70歳代前半や60歳代後半の中間層でより高率となっている。(3)「友達がふえた」、「小遣いができた」比率はいずれも女性の方が高くなっており、より高齢者ほど高率になっているのに対し、「家族が喜んでいる」比率は男性の方が高く、いずれかといえば若い層ほど高率になっている。(4)これに対し、「社会に役立つ」比率は、これまでみてきたように「地域社会」への寄与に価値志向の強い男性でより高く、とくに60歳代後半や70歳代前半の中間世代で高率になっている。(5)さらに「経験・能力が生かされた」とする比率は、一般に「経験・能力」が豊富な男性ではなく、女性においてより高くなっているのは、男性ではこうした評価がより低いことの反映でもある。

こうしてみると、事業団に入ってから「生活の変化」は選択肢が豊富なだけにさきの事業団で働いてみた「感想」よりも重要な事実を示し

表 7 男女・年齢階層別事業団に入ってから生活変化

(MA, %)

性・年齢	生活に張り	初めて働いた	健康によかった	小遣ができた	友達がふえた	社会に役立つ	経験・能力が生かされた	家族が喜んでいる	その他・不明	計	
総数	102 (58.3)	33 (18.9)	117 (66.9)	73 (41.7)	78 (44.6)	68 (38.9)	40 (22.9)	70 (40.0)	15 (8.9)	596 (340.6)	
男	60~64	7 (46.7)	3 (20.0)	11 (73.3)	3 (20.0)	3 (20.0)	4 (26.7)	3 (20.0)	8 (53.3)	2 (13.3)	44 (293.3)
	65~69	22 (52.4)	6 (14.3)	31 (73.8)	14 (33.3)	21 (50.0)	20 (47.6)	9 (21.4)	19 (45.2)	3 (7.1)	145 (335.2)
	70~74	18 (66.7)	5 (18.5)	17 (63.0)	13 (48.1)	16 (37.0)	12 (44.4)	6 (22.2)	15 (55.6)	—	96 (355.6)
	75~79	4 (40.0)	—	7 (70.0)	4 (40.0)	3 (30.0)	3 (30.0)	3 (30.0)	4 (40.0)	2 (20.0)	30 (300.0)
	計	51 (54.3)	14 (14.9)	66 (70.2)	34 (36.2)	37 (39.4)	39 (41.5)	21 (22.3)	46 (48.9)	7 (7.4)	315 (335.1)
女	~59	3 (75.0)	—	2 (50.0)	1 (25.0)	—	1 (25.0)	—	1 (25.0)	1 (25.0)	9 (225.0)
	60~64	15 (62.5)	6 (25.0)	11 (45.8)	11 (45.8)	12 (50.0)	5 (20.8)	6 (25.0)	5 (20.8)	2 (8.3)	73 (304.2)
	65~69	14 (73.7)	8 (42.1)	14 (73.7)	9 (47.4)	9 (47.4)	7 (34.8)	4 (21.1)	9 (47.4)	1 (5.0)	75 (395.0)
	70~74	12 (67.0)	3 (17.0)	14 (77.8)	11 (61.1)	9 (50.0)	8 (44.4)	6 (33.3)	5 (27.8)	2 (11.1)	70 (388.9)
	75~79	5 (62.5)	2 (25.0)	4 (50.0)	3 (37.5)	4 (50.0)	5 (62.5)	2 (25.0)	2 (25.0)	1 (12.5)	28 (350.0)
計	49 (67.1)	16 (26.0)	45 (61.6)	35 (47.9)	34 (46.6)	26 (35.6)	18 (24.7)	22 (30.1)	7 (9.6)	255 (349.3)	

総数には性別不明8人の回答を含む。パーセントは男女・年齢階層別人数を分母とする。

ている。ただし、世代差はこれまでみてきたのとほぼ同様にそれほどあきらかでないが、男女差ははっきりしている。男性のばあいは何よりも「健康によかった」という「変化」を始め、「家族が喜んでいる」、「社会に役立つ」比率がより高くなっている。いずれも貴重な「変化」ではあるが、反面、「経験・能力が生かされた」、「小遣いができた」、「友達がふえた」などの評価が比較的低い面は見落せない。これに対し女性の方は、「生活の張り」を始め、「小遣いができた」、「友達がふえた」、そして「初めて働いた」という評価が相対的に多く、男性より以上に自分の「生活」に即した肯定的な評価がより多くなっていることが知られる。

世帯類型と周囲の感想

すでにみたように、「家族が喜んでいる」比率は70歳代前半を中心として、男性のばあい、より高率だった。この調査でもっとも興味深いのは、こうした家族を中心とした周囲の「感想」を会員の実感を通してあきらかにしていることである。それをみるに先立って、会員の世帯員構成をタイプ別にみておこう。それを示す表8によると、(1)「一人暮らし」は少ないが、女性の70歳以上を中心として女性ではすでに10%以上に達している。(2)もっとも多いのは「夫と妻」の高齢者だけの世帯と「夫と妻と子」世帯であり、それぞれ24~25%を占めている。さらに「夫あるいは妻と子」世帯を加えると、二世帯世帯は30%に達する。(3)それらに対し、「夫と妻と子と孫」世帯も20%近くを数えるが、これに「夫あるいは妻と子と孫」世帯を加えると、31%に達する。したがって、二、三世帯世帯ともそれぞれほぼ30%を占め、一人暮らしを含めて高齢者だけの世帯も30%を占めているわけである。集計対象は男性が多いので、全国の高齢者世帯に比べると、一人暮らしはまだ少なく、夫婦のみの世帯と二世帯世帯がより多く、三世帯もより少なくなっている。

このような家族や親類や、さらにふえつつある友達などは、本人が事業団で働いていることをいかに評価しているか。この「感想」は本人が感じ

表 8 男女・年齢階層別世帯タイプ構成

(人, %)

性・年齢	一人暮らし	夫と妻	夫と妻と子	夫ある妻は妻と子	夫と妻と孫	夫ある妻は妻と孫	その他・不明	計
総数	9 (5.1)	44 (25.1)	42 (24.0)	11 (6.3)	33 (18.9)	21 (12.0)	15 (8.6)	175 (100.0)
男	60~64歳	—	4 (26.7)	9 (60.0)	—	2 (13.3)	—	15 (100.0)
	65~69	—	15 (35.7)	15 (35.7)	1 (2.4)	10 (23.8)	1 (2.4)	42 (100.0)
	70~74	—	6 (22.2)	10 (37.0)	1 (3.7)	6 (22.2)	3 (11.1)	27 (100.0)
	75~79	—	2 (20.0)	—	—	6 (60.0)	—	10 (100.0)
	計	—	27 (28.7)	34 (36.2)	2 (2.1)	24 (25.5)	3 (3.2)	94 (100.0)
女	~59	—	—	2 (50.0)	—	1 (25.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
	60~64	2 (8.7)	6 (26.1)	4 (17.4)	4 (17.4)	3 (13.0)	4 (17.4)	23 (100.0)
	65~69	1 (5.3)	8 (42.1)	2 (10.5)	2 (10.5)	1 (5.3)	5 (26.3)	19 (100.0)
	70~74	4 (22.2)	1 (5.6)	—	1 (5.6)	3 (16.7)	8 (44.4)	18 (100.0)
	75~79	2 (25.0)	2 (25.0)	—	2 (25.0)	1 (12.5)	1 (12.5)	8 (100.0)
計	9 (12.5)	17 (23.6)	8 (11.1)	9 (12.5)	9 (12.5)	18 (25.0)	72 (100.0)	

総数には性別不明の回答も含む。

取っている範囲であきらかになるに過ぎないが、その「感想」をみるまえに、本人が感じ取っている「周囲」の構成をみておこう。それは表9のように、男性のばあいは半数以上が「妻」によって占められており、「子供」22%、「孫」9%、「親類」と「知人・友達」合わせて9%となっている。それに対し女性のばあいは、「一人暮らし」が多いせいもあり、「夫」は25%に止まり、「子供」が40%近くに達している。そして「孫」7%、「親類」と「知人・友達」は合わせて14%を占めている。このように、男性から見ると「感想」を寄せてくれる「周囲」は何よりも「妻」であり、女性から

表 9 男女・本人との関係別周囲の人の本人が働いていることへの感想

(MA, %)

関 係	元気で働 き、喜ん でいる	健康を心 配してい る	困らない ので、働 かないで 欲しい	家で遊ん でいて欲 しい	仲間と働 くのはよ いことだ	小遣いな どを喜ん でいる	配分金を 渡され喜 んでいる	その他	計	〔周囲の 構 成〕	
総 数	200 (57.1)	46 (13.1)	2 (0.6)	3 (0.9)	45 (12.9)	33 (9.4)	15 (4.3)	4 (1.1)	350 (100.0)	〔 ー 〕	
男	妻	63 (60.6)	15 (14.4)	1 (1.0)	—	8 (7.7)	4 (3.8)	12 (11.5)	1 (1.0)	104 (100.0)	〔 53.9 〕
	子 供	24 (55.8)	11 (25.6)	—	—	7 (16.3)	—	—	1 (2.3)	43 (100.0)	〔 22.3 〕
	孫	4 (23.5)	—	—	—	—	13 (76.5)	—	—	17 (100.0)	〔 8.8 〕
	親 類	5 (50.0)	3 (30.0)	—	—	1 (10.0)	1 (10.0)	—	—	10 (100.0)	〔 5.2 〕
	知人・ 友達	4 (57.1)	—	—	—	2 (28.6)	—	—	1 (14.3)	7 (100.0)	〔 3.6 〕
	不 明	12 (100.0)	—	—	—	—	—	—	—	12 (100.0)	〔 6.2 〕
	計	112 (58.0)	29 (15.0)	1 (0.5)	—	18 (9.3)	18 (9.3)	12 (6.2)	3 (1.6)	193 (100.0)	〔100.0 〕
女	夫	22 (64.7)	4 (11.8)	—	—	5 (14.7)	1 (2.9)	1 (2.9)	1 (2.9)	34 (100.0)	〔 24.5 〕
	子 供	35 (64.3)	6 (11.1)	—	3 (5.6)	10 (18.5)	—	—	—	54 (100.0)	〔 38.8 〕
	孫	3 (20.0)	1 (6.7)	—	—	1 (6.7)	10 (66.7)	—	—	15 (100.0)	〔 10.8 〕
	親 類	3 (33.3)	3 (33.3)	1 (11.1)	—	2 (22.2)	—	—	—	9 (100.0)	〔 6.5 〕
	知人・ 友達	3 (30.0)	1 (10.0)	—	—	5 (50.0)	1 (10.0)	—	—	10 (100.0)	〔 7.2 〕
	不 明	14 (82.4)	—	—	—	1 (5.9)	1 (5.9)	1 (5.9)	—	17 (100.0)	〔 12.2 〕
計	80 (57.6)	15 (10.8)	1 (0.7)	3 (2.2)	24 (17.3)	13 (9.4)	2 (1.4)	1 (0.7)	139 (100.0)	〔100.0 〕	

周囲の構成も多答の構成比を示す。

みると何よりも「子供」なのである。

このような「周囲」からみられていると思われる「感想」は表9のとおりである。それによると、(1)圧倒的に「元気で働けることを喜んでいる」という「感想」が多く、60%近くを占めている。(2)つづいて「仲間と働くのはよいこと」、「小遣いや物を買ってもらって喜んでいる」、また「健康を心配している」が多いが、いずれも10%内外に止まっている。(3)さらに「配分金を渡され、喜んでいる」という肯定的評価も意識されている。これらに対し、生活に「困らないので働かないで欲しい」、「家で遊んでいて欲しい」という「感想」も意識されているが、それらはきわめて少数に止まっている。

こうした「周囲」の「感想」を本人との関係別にみていくと、(1)圧倒的に多い「元気で働けることを喜んでいる」のはとくに女性であきらかなように「夫」と「子供」で多く、男性のばあいは「妻」と「子供」で多くなっている。それに対し、(2)「健康を心配している」のは、男性のばあ「子供」と「親類」で多く、女性のばあいはとくに「親類」が多くなっている。(3)「仲間と働くのはよい」という「感想」は、男性では「知人・友達」で多く、女性でもとくに「知人・友達」で多くなっている。そして、(4)微笑ましいのは、「小遣いや物を買ってもらえるので喜んでいる」のは圧倒的に「孫」で多くなっていることである。さらに、(5)「家で遊んでいて欲しい」というネガティブな「感想」を示しているのは、女性の「子供」であるが、それはきわめて少数の「感想」でしかないのである。

このように、男性はまず「妻」、つぎに「子供」、女性はまず「子供」、つぎに「夫」から、「元気で働けることを喜んで」もらって働いているわけだが、それは本人が感じている「周囲」の「感想」なのだから、本人の感じ取り方をも示しているわけである。そこでつづいて、こうした「感想」を前述のような「自分の生活の変化」とのクロスでみてみよう。

それは表10のとおりだが、(1)まず圧倒的に多い「元気で働けることを喜んでいる」「周囲」の「感想」は、男性でも農家出身なので外で「初めて働いた」ほか、「小遣いができた」、「経験能力が生かされた」などで多くなっ

表 10 男女・生活の変化別周囲の人の本人が働いていることへの感想

(MA, %)

生活の変化	男							女						
	元気で働ける	健康が心配	仲間と働く	小遣いなど	配分金を喜ぶ	その他・不明	計	元気で働ける	健康が心配	仲間と働く	小遣いなど	配分金を喜ぶ	その他・不明	計
生活に張り	39 (76.5)	11 (21.6)	10 (19.6)	8 (15.7)	4 (7.8)	7 (13.7)	79 (154.9)	40 (81.6)	8 (16.3)	12 (24.5)	8 (16.3)	2 (4.1)	8 (16.3)	78 (159.2)
初めて働けた	13 (92.6)	4 (28.6)	5 (35.7)	1 (7.1)	3 (21.4)	1 (7.1)	27 (192.9)	11 (68.8)	4 (25.0)	11 (68.8)	1 (6.3)	1 (6.3)	6 (37.5)	34 (212.5)
健康によい	56 (84.8)	16 (24.2)	15 (22.7)	13 (19.7)	9 (13.6)	7 (10.6)	116 (175.8)	35 (77.8)	8 (17.8)	24 (53.3)	5 (11.1)	2 (4.4)	10 (22.2)	84 (186.7)
小遣いが増えてきた	30 (88.2)	10 (29.4)	12 (35.2)	6 (17.6)	7 (20.6)	5 (14.7)	70 (205.9)	27 (77.1)	4 (11.4)	3 (8.6)	4 (11.4)	2 (5.7)	9 (25.7)	49 (140.0)
友達がふえた	30 (81.1)	15 (40.5)	13 (35.1)	8 (21.6)	5 (13.5)	4 (10.8)	75 (202.7)	27 (79.4)	6 (17.6)	14 (41.2)	5 (14.7)	2 (5.9)	10 (29.4)	64 (188.2)
社会に役立つ	31 (79.5)	11 (28.2)	10 (25.6)	10 (25.6)	5 (12.8)	6 (15.4)	73 (187.2)	17 (65.4)	5 (19.2)	9 (34.6)	5 (19.2)	1 (3.8)	7 (26.9)	44 (169.2)
経験・能力が生かされた	18 (85.7)	3 (14.3)	6 (28.6)	6 (28.6)	3 (14.3)	2 (9.5)	38 (181.0)	9 (50.0)	2 (11.1)	6 (33.3)	2 (11.1)	2 (11.1)	7 (38.9)	28 (155.6)
家族が喜んでいる	37 (80.4)	11 (23.9)	14 (30.4)	8 (17.4)	6 (13.0)	6 (13.0)	82 (178.3)	15 (68.2)	3 (13.6)	9 (40.9)	4 (18.2)	2 (9.1)	6 (27.3)	39 (177.3)

生活の変化の回答を分母とするパーセントを示す。

ている。これに対し女性では、とくに「生活に張り」と「友達がふえた」で多くなっている。こうしてみると、「生活に張り」という評価には、こうした「周囲」から「元気に働けることを喜んで」もらっているという自覚も含まれていることがわかる。(2)それに対し「健康が心配」されている比率は、男性では「友達がふえた」、女性では「初めて働けた」などでとくに多くなっている。つまり、本人は「友達がふえた」り、「初めて働けた」りして喜んでいますが、「周囲」からは「健康が心配」されている、と思っているのである。(3)「仲間と働くのはよい」比率は、男性よりも女性で顕著なのだが、とくに「初めて働けた」、「健康によい」で50%を上回っており、より多くなっている。このように、とくに女性のばあい「初めて」外で「仲間と働く」ことを積極的に評価しているのである。現在の高齢者女性の世代の特徴が示されているのだろう。(4)孫などが「小遣いなど」を喜んでる比率も、男性では「経験・能力が生かせた」、女性でも「社会に役立つ」、「家族が喜んでいる」などの評価との関連が強くなっている。

仕事の種類、就業日数、配分金の希望

以上みてきたように、この調査ではとくに「楽しい」、「友達」のこと、「健康」、「生活の張り」、「社会に役立つ」、あるいは「配分金」などで、事業団で働くことが非常に肯定的に評価されていることがあきらかにされているわけだが、最後に「最も希望する仕事の内容、日数、時間、配分金」の要望についてもあきらかにしている。ただし、これまでのデータ以上に不明が多いえに、仕事の種類については自由な記入を求めているので、集計しにくいので、就業日数・時間と配分金についてのみ集計した。その結果は表11のとおりである。ただし、各事項の回答数が少しずつ異なるので、希望する配分金日額を希望する月間就業日数に掛けても配分金月額にはかならずしもならない。

集計結果によると、月間就業日数は全体とすれば13日間ほどの希望にな

表 11 男女・年齢階層別希望就業日数・時間・配分金

性・年齢	回答者数	就業日数		一日当たり時間	配分金		
		月間	週間		月額	日額	
総数	125	12.8	3.3	6.2	4.9	4,058	
男	60～64歳	10	17.0	4.0	7.0	4.5	4,064
	65～69	33	15.6	4.0	6.4	7.4	4,958
	70～74	22	16.0	4.0	6.3	5.6	3,961
	75～79	7	9.8	2.6	6.3	4.1	3,800
	計	72	15.3	3.8	6.4	6.2	4,416
女	～59	2	7.5	1.8	6.0	3.5	3,500
	60～64	15	10.2	2.7	5.7	3.3	3,685
	65～69	14	12.3	3.1	5.5	4.0	3,400
	70～74	15	7.2	1.8	6.2	2.8	3,620
	75～79	—	—	—	—	—	—
計	46	9.7	2.5	5.8	3.4	3,571	
不明	7	8.3	2.1	6.3	3.4	3,800	

—は不明を示す。

っているが、男女差が大きく、男15日間、女10日間ほどとなっている。こうした希望は現状をほぼ30%ほど上回っているとみてよい。週間就業日数でみると、男3.8日間、女2.5日間の差がみられる。年齢階層別には、男性の70歳代後半、女性の70歳代前半のように高齢者ほど希望日数は少ないが、かならずしもより若いほど長くなっているわけではない。男性は60歳代前半で多少長くなっているが、女性では60歳代後半で最長になっている。しかし、一日当たり労働時間となると、多少事態は異なる。まず、男性6.4時間、女性5.8時間のように男女差はそれほど大きくない。また、男性のばあいは若いほど多少より長い、女性では70歳代前半で6時間を多少超え、もっとも長くなっている。

このように、全体とすれば週3日間、月間13日間ほどの就業の希望しており、一日当たり6時間程度の部分就業を希望しているわけだが、配分金でも、月額で男性6万円ほど、女性3万円ほど、日額にすると男性4,400

円ほど、女性 3,600 円ほどを希望している。現状は男女別にはわからないが、平均して 3.2 万円、3,250 円だから、男性ほど現状より大きな希望を示している、とみられる。そのなかで、女性のばあい年齢階層差はそれほどないが、男性のばあいは 60 歳代後半で一日 5,000 円、月額 7.4 万円を希望しており、もっとも大きくなっている。このような希望の差は、希望する仕事の差を反映しているに違いない。その点を個別に当ててみよう。

まず、男性の 60 歳代前半層は、前述のように生活がかかっている度合いが高い反面、とくに「元気」なことを評価しているように病弱者が多いのか、あるいは高い職業能力を持つ者が少ないためか、仕事の希望にも格別注目される内容がない。多くは「とくになし」、「なんでもよい」であり、具体的な希望も「梱包」程度に止まっており、配分金のアップを求めている一人は「コンピュータ機器の組立」を希望しているのが目立つ程度である。自由記入欄をみると、彼は「元気で働けるのは喜びだが、そのためには生活が維持されねばならぬ」とコメントしている。

それに対し男性の 60 歳代後半層では、「とくになし」、「なんでも」、「いまと同じ」もみられるが、管理人や警備や清掃や除草や消毒や梱包などにまじって、溶接、大工、植木、塗装、それにくらべれば少ないが、事務などの比較的高度の職種がみられ、これらのなかには月間 25 日間、日額 8 千円～1 万円以上のかかなり本格的な就業希望者もかなりみられる。事業団がないばあいの選択では、前述のように 60 歳代前半の方が労働力化選好がより高かったが、仕事の質の選好は 60 歳代後半の方がより高くなっている、とみてよい。というのは、60 歳代前半までは職安でも職業紹介の対象にしており、とくに職人的職種への再就職は比較的容易なのに比べて、60 歳代後半になると雇用保険の適用外にもなり、再就職も社会福祉協議会の無料職業紹介所に頼らねばならない。それだけに、60 歳代前半とは異なり、事業団の会員にも職人的職種や事務などの仕事の選好が潜在しており、事業団の就業では満たされていないのである。

こうした傾向は、男性の 70 歳代前半にも多少認められる。例えば「機械

の操作」とか、「調査事務や企画・調整・運営」などの事務、あるいは「責任があり、やり甲斐のある仕事を望む」などの希望がみられるが、しかし配分金の希望は60歳代後半とは異なり、それほど高くない、とみてよい。これらに対し、女性のばあいは、前掲のような軽作業のほか「宛名書き」などの「簡単な事務」、「洗濯」などの「家事」、その「手伝い」などの希望が多く、男性と異なり、「管理人」や「警備」の希望は少ない。また配分金の希望も、とくに高額なケースはほとんどみられないのである。

センターへの要望

むしろ、前述以外のさまざまな要望が今後の事業団の運営にとって重要な意味を持っているだろう。それはいずれも「自由記入欄」に記入された要望だが、それをまとめてみると、なかにはすでに解明してきたような事業団に入会している満足感を示した記入も多いが、それ以上につきのような要望がより多くなっている。とはいっても、明確な要望は、男性19件、女性13件、計32件——回答者の20%弱——に過ぎないが、そのなかでは、(1)仕事の不足がもっとも多く、男女とも6件を数えている。(2)このような本人にとっての仕事不足とも関連すると同時に一般的な問題として、仕事の割り当てを均等化させる要望も多く、男性6件、女性2件を数えている。(3)そのほか、女性では「人間関係」に関する苦情や要望が3件指摘されており、一人暮らしへの情報の流し方や内職の要望や自分の家庭の家事のため事業団の仕事に就けない理由なども記入されている。(4)男性のばあいは、重ねて配分金の上昇、昇給の要望や慰安旅行などの福祉の要望のほか、一般や本人への情報活動やPRの仕方、安全管理や職場管理や設備の整備への要望が1～2件づつ記入されている。そのうち、福祉政策として「多年会員の死亡弔慰金」の「積立て」も提案されているのも注目されてよいだろう。

4. 総括と今後の課題

本稿は、雇用でも自営業でも社会奉仕でもなく、国際的に類例のない任

意な就業の事業団による組織化を試みているシルバー人材センターの問題点と登録会員の生活・意識状況を考察してきた。それによれば、地域の高齢者の一部を組織しているに過ぎないが、まだ仕事の受託が不足しており、とくに男性会員が希望する、前述のように事務的、技能的などの仕事の種類や条件を十分に満たしていない。ただし、このような希望の一部には、かならずしも「補助的、短期的な仕事」に止まらず、もっと本格的な長期の就業を希望する潜在的な失業者の求職も含まれている。その点については、今回改定された「高齢者雇用安定法」によってシルバー人材センターで就職を斡旋できるようになった。それにしても、今後さらに一層、会員がふえ、受託活動などが活発になれば、パートの労働市場をますます「侵蝕」することになり、地域における就業構造のなかでのもっと明確な位置づけが問題になるだろう。

さらに、仕事の質と量に対する不満だけでなく、会員のなかには仕事の割り当てに対する苦情も多い。というのは、特定の高齢者には仕事の割り当てが少なく、他の特定の高齢者には例えば工場などの「補助的」な仕事がかかり長期的に割り当てられるような実態がみられるからである。後者の事例のなかには、発注者が特定の高齢者の長期就業を求めているばあいもある。こうしたケースはパートタイマーなどとして雇用されるべきであり、センターはそのための斡旋が可能となったのである。それ以外でも仕事の割り当て問題が残るだろう。冒頭で触れたようにセンターが「自主的な団体」として成熟していくためには、なにが公平な割り当てなのか、就業時間や配分金が全員均等なことが公平なのか、能力や意欲などにもとづいて割り当てられればよいのか、どのような割り当て基準を作成するかなどについても自主的に決定されるべきだろう。

実はシルバー人材センターは、理事会のなかにさまざまな執行のための部会や事務局の下には地域班や職群班が組織されており、それらが事務局と一体となって自主的に運営に当たる仕組みになっている。それが不十分な活動しかしていないか、あるいは十分に認識されていないために、運営

そのものへの参加希望もみられる。すでに会員の意識状況についてみたように「働くこと」によって「地域社会に役立つ」ちたい、というニーズも男性の60歳代後半や70歳代前半を中心としてかなり強い。こうしたニーズを満たすためにも、ヴォランティアとしてか、あるいはセンターが発注し受託する仕事として、会員の運営のための仕事への参加も進められるべきだろう。それによって、事務や対人折衝や企画・管理などの「経験・能力」もより生かれることになるだろう。こうした点も自主的に決定されるべきであり、そうした状況を醸成するための啓蒙がもっと強化されるべきだろう。

前述のように、登録会員の多くは、健康で仕事好きで、しかも交際好きの年金生活者によって占められている。このように勤労志向がいちじるしく高いのは、前述のような地域性を除外しても、現在の高齢者の趣味活動や社会活動などへの志向・スキルなどが相対的に小さい事実の反映でもある。したがって、前述のようにセンターに対する要望としても顕著ではないが、慰安旅行などの余暇活動の組織化のニーズも潜在化させている、とみてよい。このような活動については老人クラブなどの既成の団体との連係も必要だが、一緒に働いている仲間の余暇活動としてセンターが組織の場となることも推進されるべきだろう。このような活動もまた、会員による自主的な運営に委せるべきなのはいうまでもない。

さらに、このように自主的な運営が真に実現されるためには、公益法人の会計ルールや社団法人などによるさまざまな制約も見直されねばならぬだろう。そのためには、特殊法人か、せめて福祉法人に編成し直すことが必要になるかも知れない。そうでなければ、財政的な自立の展望もえられないだろう。

(後記 本稿の調査資料については、前述のように武蔵村山市シルバー人材センターなどから提供された。また集計作業については私の演習生の協力をえた。記して謝意を表しておきたい。)